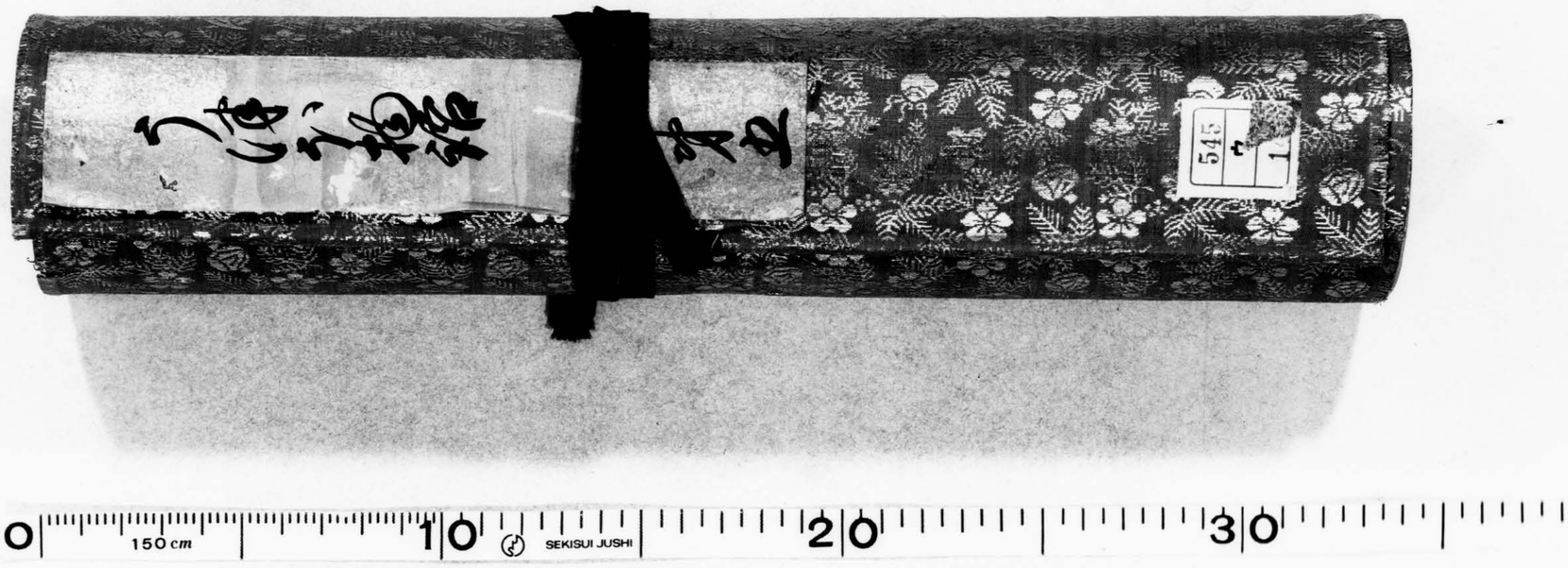
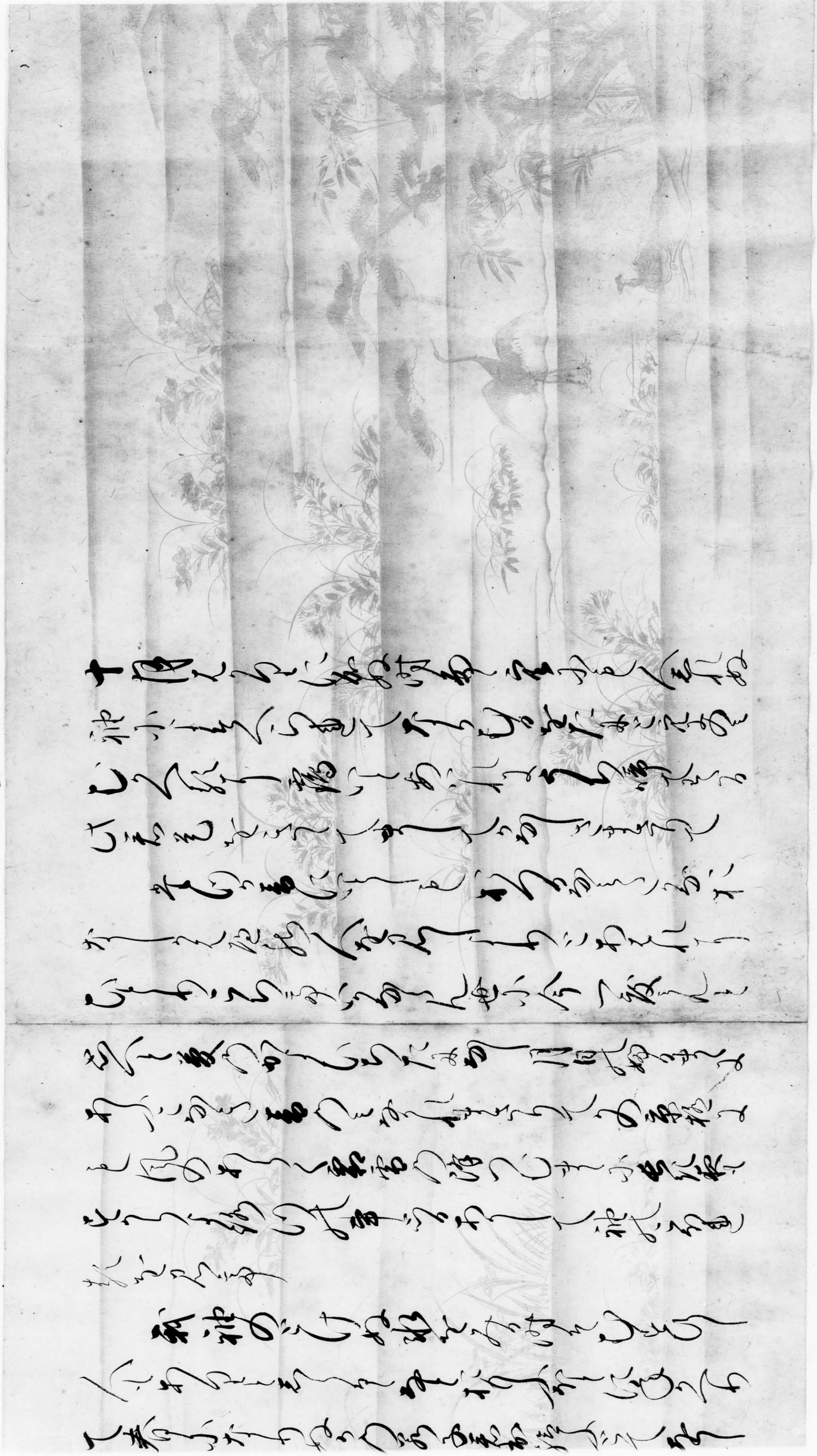

545
ト
1

545
ウ
14

九州大學圖書印

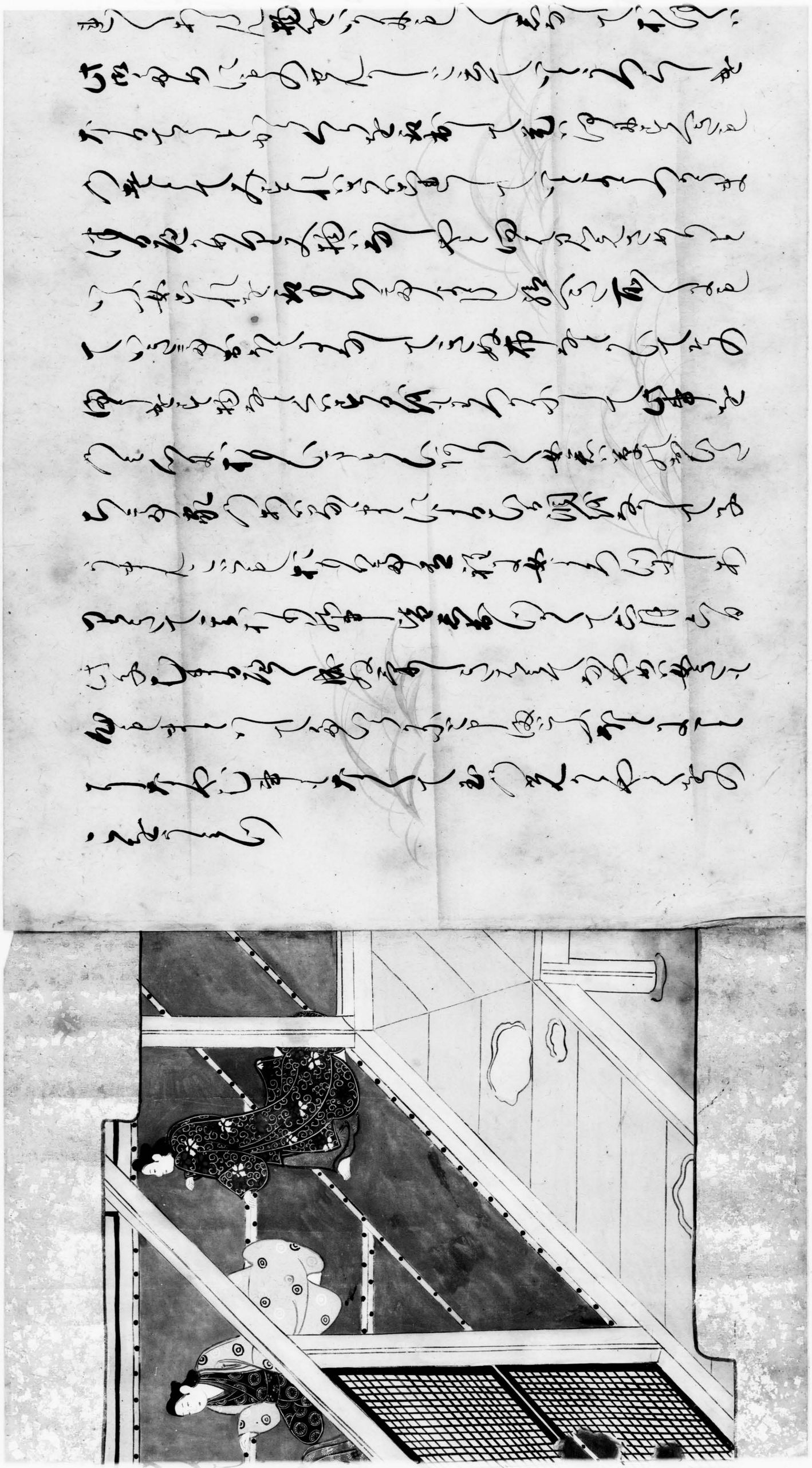
九州大學圖書
昭和 24 3. 19
182191

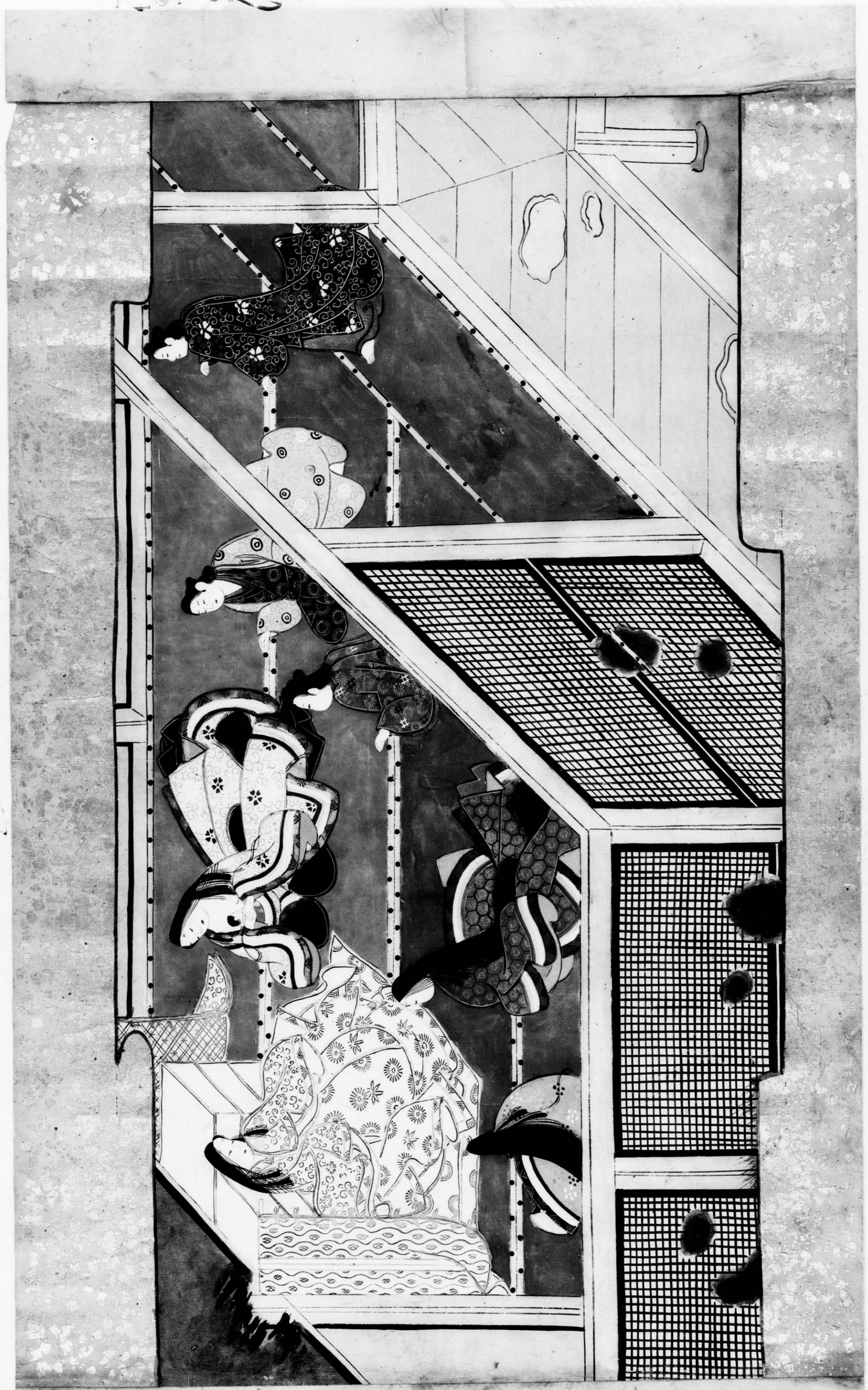


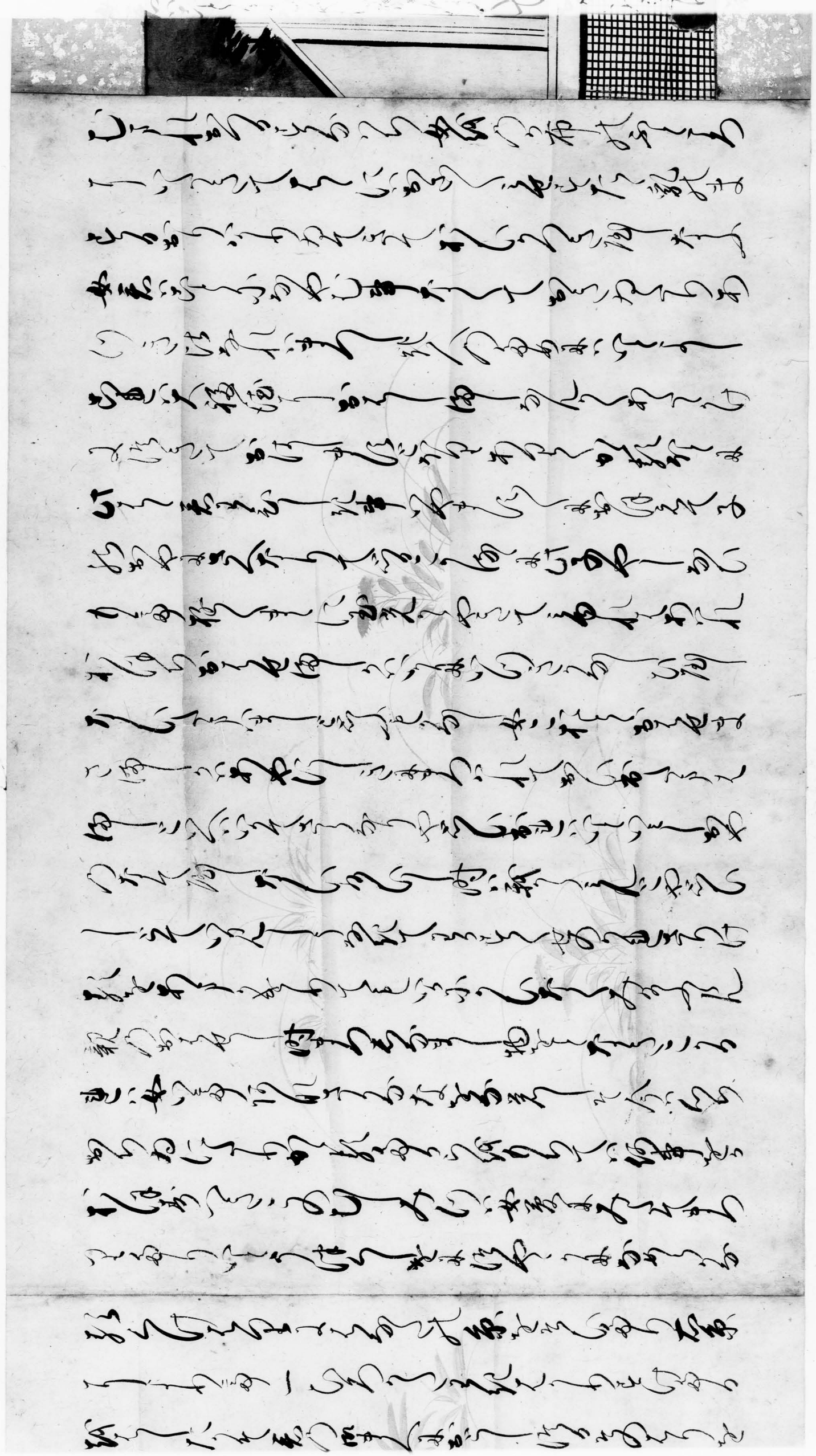
ともうち給ひける事ゝあらして神もなにとも
あれとかんにや
我袖のこけぬ物をみかけてむとより
人はわりと云ふをことかりよかしとはるかに
て春は小なりぬるの君かたへいらて云て
おりともよふるよ不の節ひらをみにや
云ひしとちうけし枝をも見えよふりあめ
人をかれなかりにまた云ひいふな涙り人にや
子うし給ふかしにかるゆるえかしらそわたる
よらての涙と云よせ給ひ女たれをかへせやこそ
まへよおこそうらうらしきさてみゆるといや
ゆやしきみとらい給さ事の例あるに云ひます
りし人もちいふ物語やさゆりしいてこそわち
う秋もしによしさしくうの給へに秋をこえていふ
女わかさうろかたふつましきつゝつきまかるを
あるを女はいふく給ふつゝみいふやらつか人
さそまつとこ給をとえかめんさらわ給るたり
よ流うしさを云ふ事はしこいらよりかかはせ
かれはやを給ひいてゝちろかま女ま給はよめかのとの
あまへいうそかれまし世さらんいてあやしきと
ともいつふるかまれいつてはきてさ事は九月も
かともりせぬ給ふこ折さあるか小しそあるめこそ
こともしくとしおろしとそこいへ女さういてに九月さらん
給よきそたらしまれたれあるいとしやかく給ふ
そのちかいて今まて云ふ給はさうかるてたうか
紀女たくるわ給ふかいつて成給たんわか君九流
[illegible]

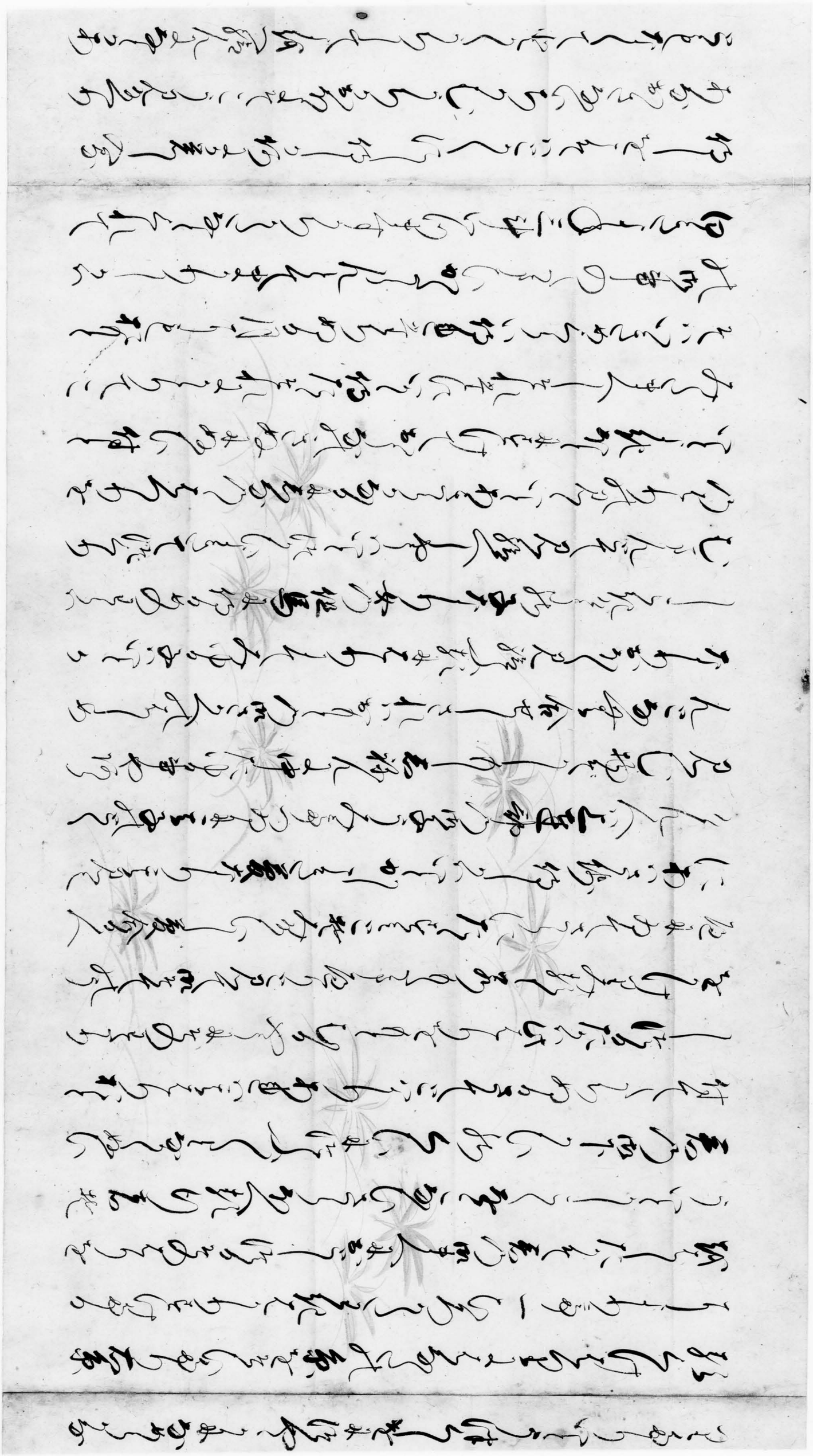
ことくとしおもひしところに女さらにこの月さへん
身よそれらしきにたれかもいとしやかて姥御前
をかけりなかいて今まて思ひ給ふさらにからそんな
此女おしくまかり給ひかいつて成給はんかの思ひ入れ
八わよくそ母にかゝき女の命をもすてかれともふ
よそにある男八に年のまへ思ひとりにも入りまへ
しかの此中にて思ひかしうにへはりて参りて候ひて
ましいうのはせんかしかなへ何ともいひ物なかれをきせ
野にをかくてともすんをもろつきまいらせんにはの
身をうこなひの給ふんことも思ひに男子とも
なりなかいかん女なかいろく流れまいらせん何の給
の此物のかにいかに○さらに身中らしおもまた此乳やき
とまし此なんとかのこともとも白の様になりたれん
あらさなし ゐなしこともなき事をしたかひてをこひ
と聞して神仏にまかりふこゝろたとなりて多くへ
たまへ又女の命をも今に給へ身なして女にひ
まいりてかの中小子もともかしあそれはそれ
かけしにつきて思ひにことしくもいえそへのわ
よしやふかき物を来てさらに宇かなりてはべる

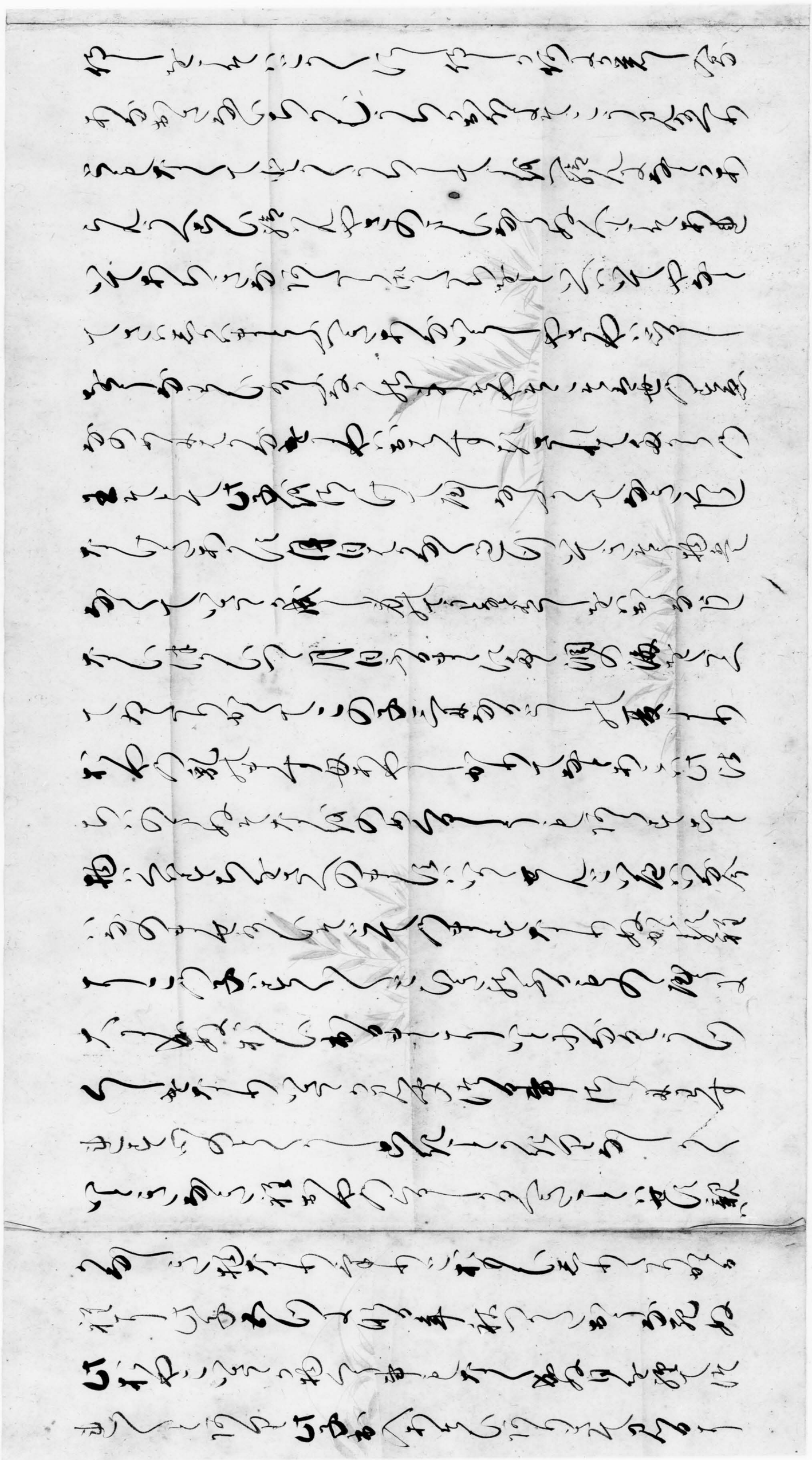
いまそのれいし候ひしつゝあそれいまみせんたまの
同しくこういうけて流しつきものありや
こいへて思いさいふかの物をいさいすゝる女御それしあ
まいらわん物をいふみとしくおもかりておほつい
はかなるめにものせんとしこちへいてこうろくをも
なかてもとかくろをもとめかして花いまみさへきとも
のきそくてみとれいさゐもりしてつまつうきま
まの御身のめてたく物いなかしやと御ゆかんさえめりと



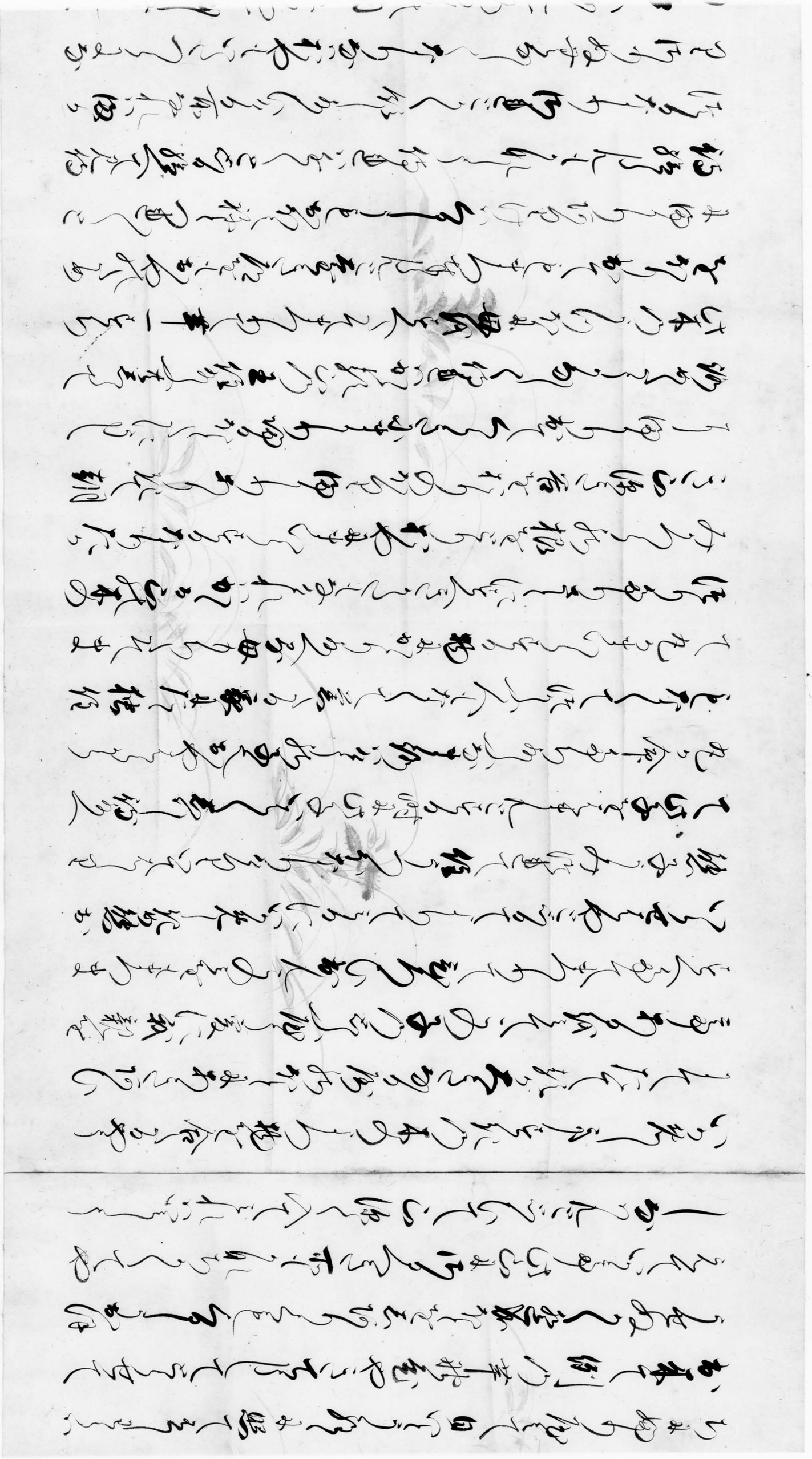


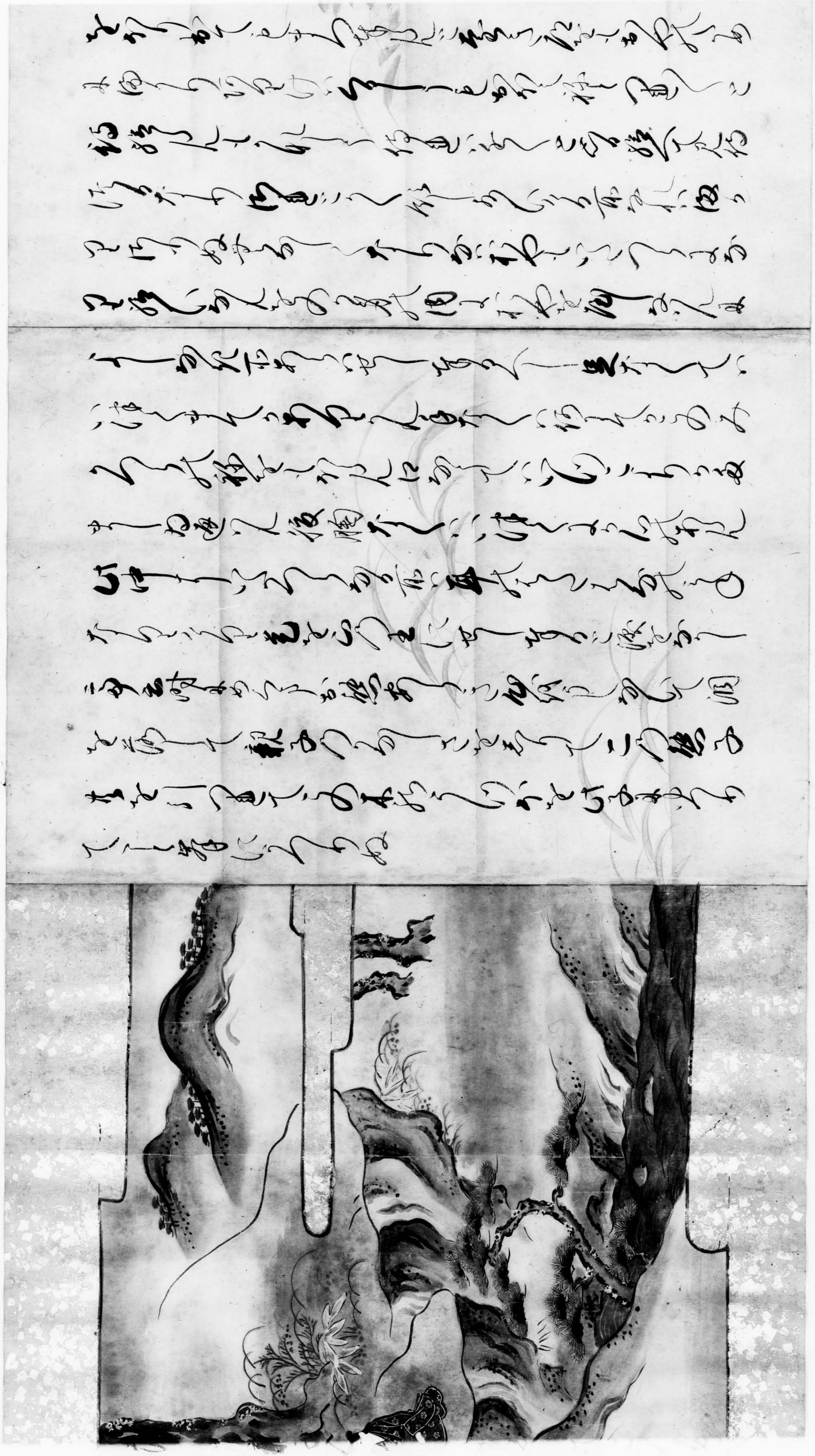


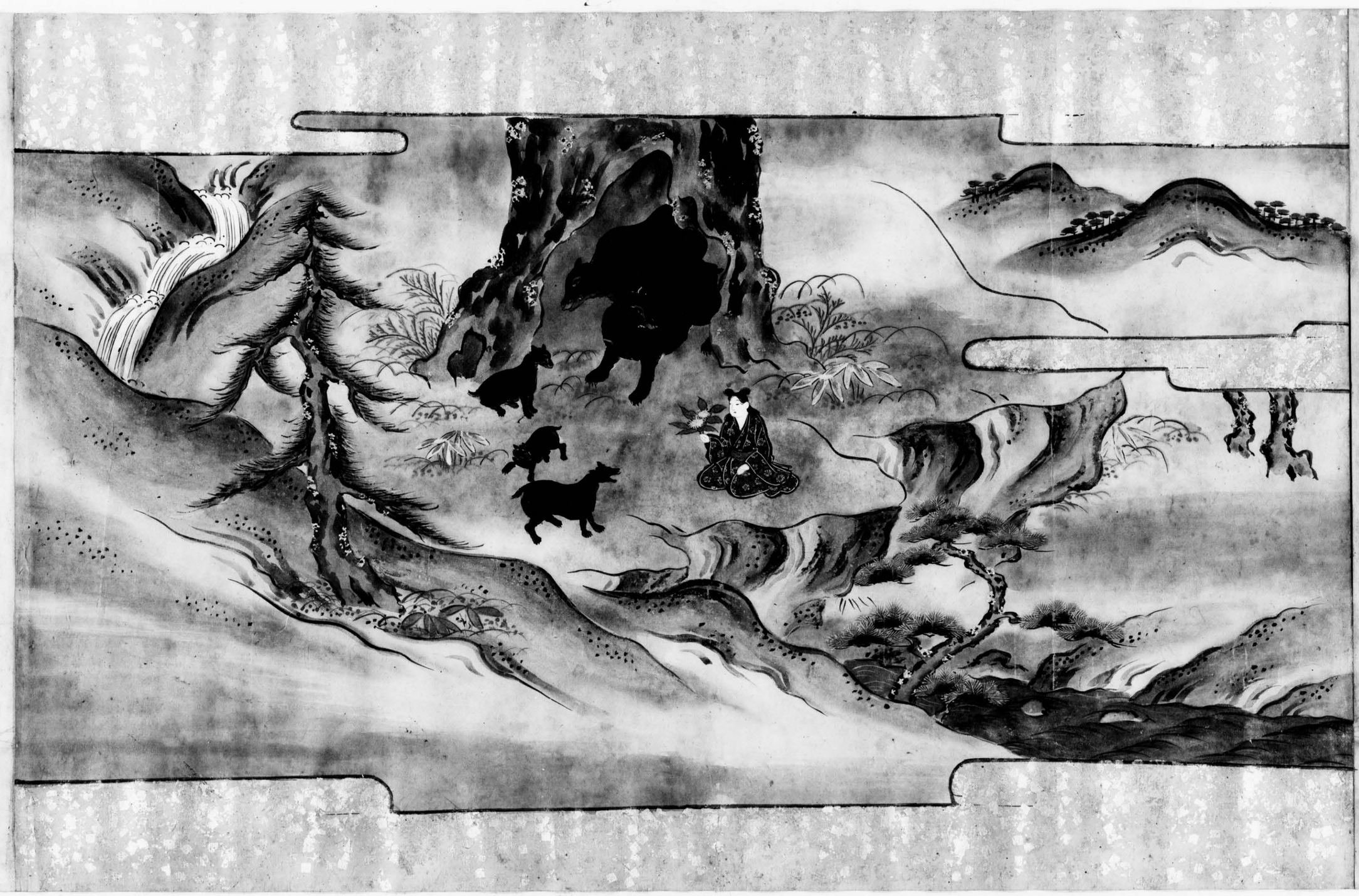




ゐるこさはたなれかをもいとおもしろかりける
ねたりしかはあるひとりよりのる年れつくしのうらに死ぬ
いわやこいてうねつくまとなくあぬりを引てけ
ものくしけりといふおへわそいけりそ人るり
母はものとなりてそのみまつりうるものこそてい
てこれはるみんこと人のつくりてとくこはるかるる
れたれいかそくるさそしえせにはしをそちろれう
ちるにかてわそいわるとけいはりとるとのいをて
はるはのみせんこそるそと云ふ親はるとして物とく
つ称したたんするせと云よさは親よいををるつと
れそと云りて行をうはてはるみはてはなしけ
なるみのかいるるはつるみおてとれいくらるをを
かるるはるはりうするもれつんと云いてはの
せんようくいとるそこくいわそしいみとるこ云らるみ
るとてれはてこせんそ多くはてこるとるへて
そるるはりて来て親よるをせをるはりくを







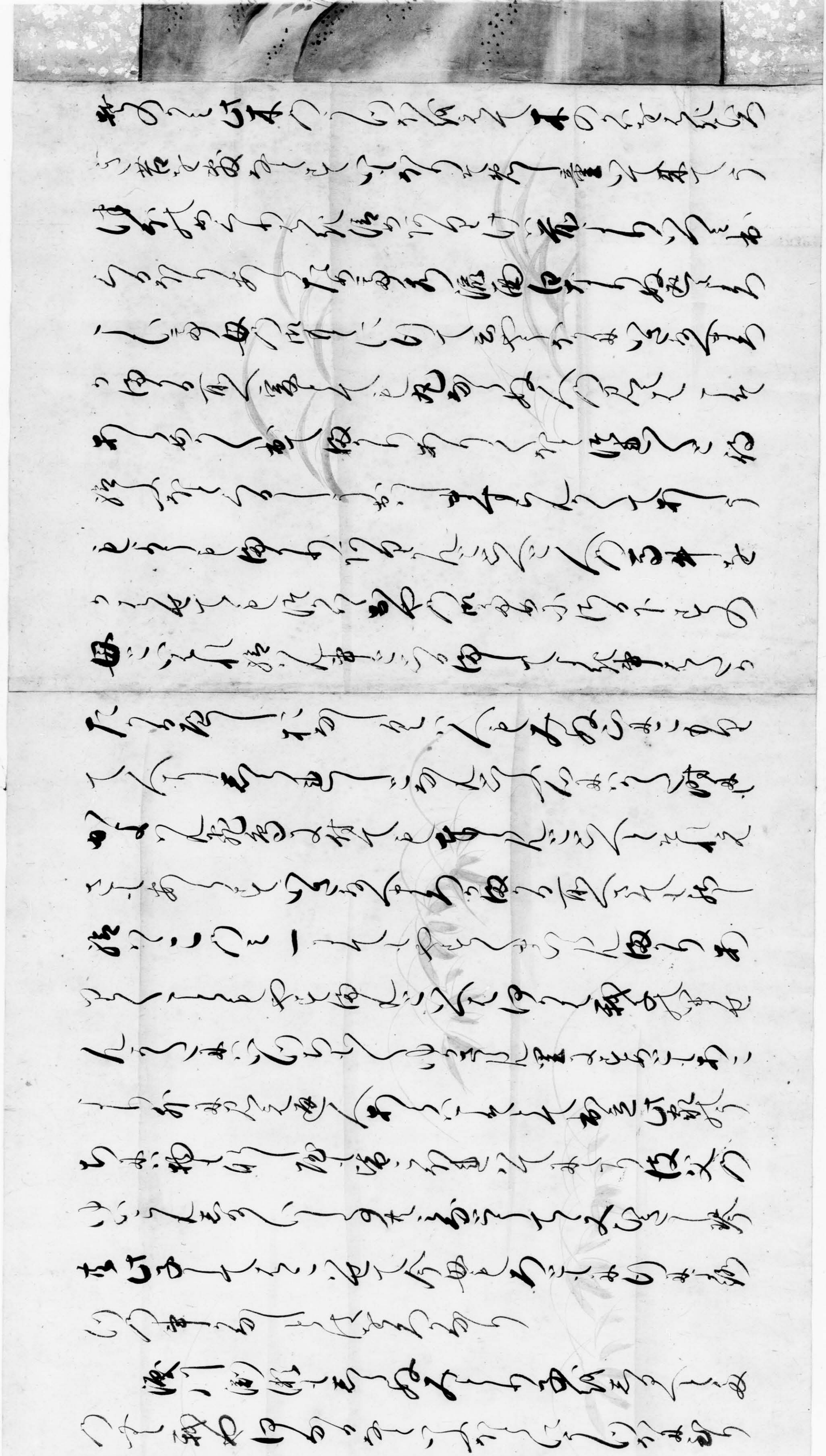
てゝこ岩にうつゝぬ

ぬ

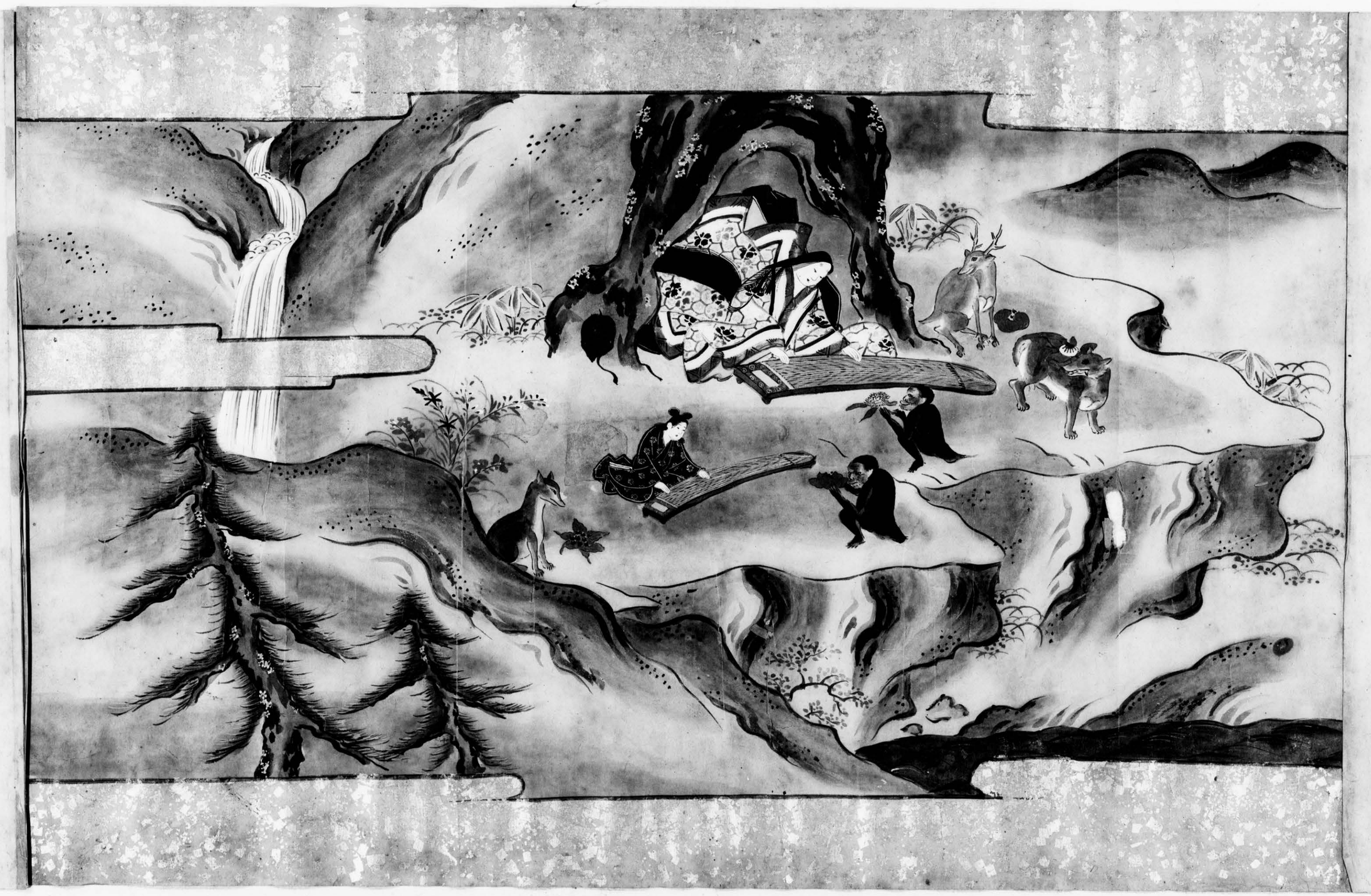
ぬのうこ山木のうこ紙をそ紙いろ

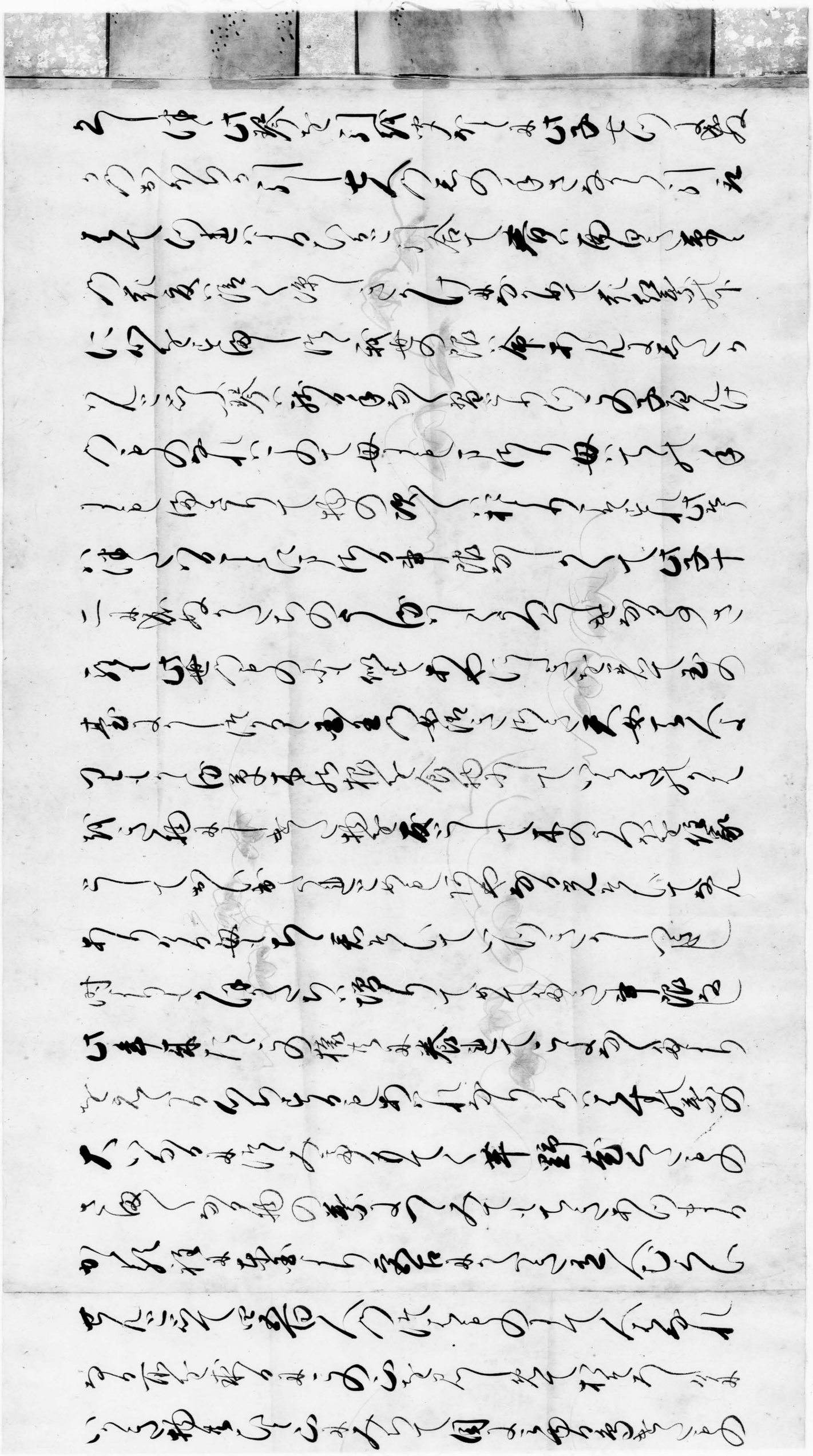
ゝ苔を変ゝとゝ紙りそ紙ゝ童ゝそ来てう

はゝ紙めゝうゝ紙語めゝ紙ちゝ紙ゝ紙ゝ



まさ子してたてこさせて今めでたうこしらへりみな終
いつまでかしとはおろかなり
深川御堂もたてぬみしり子ともおほくしてめ
つけて我やうかなしてみかへにしいかなみちり
ぬのし御さうしのかしこくてさしかしこう
はかなきもなほしたてまつり一町ばかりわおり祀にはさす
かくあれしはおかしとしいへ人の家をはるま
あれこのやりて本意なしらぬとみ松桜柏の
本しくさ物の木数をはなしてなき物なく
椎栗なりをたわしつくしものめでけるてかい
つくりおきて仏のかくしろくはおかれは
かくらはん人もとまらかしきにみえなり
つかひの人一万斗はかりてあるは出しける家
れはるかなしきかのこともちる小松原をと
み椎栗こそめづらしくて涼しくみつるけれと
はるいへひとわえてりんやしにみよつきとて見た
朝よゆきうけみなおりしてはなおきしやとまりぬた
月のまへなれは我も人も君のかきかかる物をはす
あれやしてたうしはなくて帷うちおそひてあし
くらせは家しそせめなるさはしこうそ子のみ給今は
いとまあめをのかおやつしも我事よにはなし
てなしへうしは琴なりしさて思人はりたる
へしていてつきかく風をは此子の琴なしかそを
さは我にてかくなとにきらくかしくこ事ほ
かし人あしせんをもて抱終大なとかうぬいかなくこ
ぬらしてかくめそしてうなこきからみたまかく中





[illegible]
かゝれ様に東よりあら白みとこまて人ひらくに
せんこゑそ四音人のけしきのりて人ならすなれ
あるなとをおもふにこのこゑをきゝてしはしおとろしゝかみ
いろゝ物をもひとこゑにみちて国よりあるかきこゆるの
又をしらういけるあらしくいろ獣かみこゑをたてなれ
てふけるくはみ深くして死木のしけみに親子
こゝろもて草木をふみてこゝろあらふおわつち
なともなかみえくもわすれをゝとる時みしつゝろ
養ける猿さ絶は人とおなしとみなそとめの娘
の様をしりまつをうしいてまたならを大きなる獣
みちていまし死果ことをへて並のくるまよしやう
なるみゝを通ひてらるに木のりてしにきる武士
ころも猿のまうることもたえして木の実のこくに
おとろきて山に山の物のきをしすゝてをそうる人
火をとかしておしみしせんかうと母のこゝろ
ある親は此二の琴をいさゝかもいはすとして
紀てみえしかは時なかつせとこそおろかしうる君
しらゆさめそてみもとめをいりかゝんさいそこく
斗にやいつゝつる色こそ涙なかれともしてこの
あんらせの琴をとりおて一ゑんかうともよろしきを
らてぬしのせんの落ちて歌よみてすかゝら涙
一声うつくしゝすみ大きなる山の木こそりて又
あれ山さうさふしにいりる立そこめしうの
娘満ち山ゝしうけりれておかしぬ人死せは山
けなかゝ寺にゆかりみ様おちる年の時とゝりまて
ゆいこんのうをおもかはしいく

[illegible]